



名は体を表しているか

京都大学大学院 工学研究科 教授 **木村 亮**

KIMURA Makoto

10年ほど前、学部学生向けの基礎工学の試験で「場所打ちコンクリート杭」という語句説明の問題を出した。「建設現場において、所定の地盤を掘削した後、その中に鉄筋かごを挿入し、コンクリートを打設することにより造成する杭のこと。」と答えれば100点であり、講義ではそのように説明し、ほとんどの学生は正解を書き、サービス問題であった。

ところが一人だけ、おそらく授業にも出ず、勉強も十分してこなかった学生であろうか、彼の解答は「建設現場で、杭を打つ場所の目印になるように、あらかじめ地表面に打つコンクリートの杭」と答えた。名は体を表すというが、このように書かれると、建設現場の地面に目印として打たれた、小さなコンクリート杭が目に見えなくなる。

私はここ20年近く、体力と気力と知力を使い熱心に実施している活動がある。発展途上国の雨季に泥濘化する未舗装道路を、住民と共に簡単な手法で直すNGO活動である。雨季に雨が降ると、市場や学校や病院へのアクセス道路が使えなくなり、安全で豊かな生活を送れなくなる。それが貧困の一つの原因である。

アフリカとアジアを中心に世界29ヶ国で180キロの道を直し、1万8千人に直し方を教えた。横文字の何をやっているかわからない国際NGOが多い中で、漢字で「道普請人(みちぶしんびと)」と名付けた。「道を普請する人の集まり」と、名が体を表している。

私は場所打ちコンクリート杭の協会である(一社)日本建設基礎協会の理事を長年務めている。5年ほど前から、少し声を大きく講演会などで物申していることに、「建設業法に基づく許可業種区分の見直し」がある。構造物や建物の基礎杭を、場所打ちコンクリート杭で作ろうが、既製杭を埋込もうが打設しようが、鋼管杭を回転圧入しようが、その施工に携わる専門職の人々は「とび・土工・土工事業」に分類されている。それでは仕事内容に対して「名が体を表していない」ので「基礎ぐい土工事業」として分離独立させることを望んでいる。

「基礎工事の種類」においても「とび・土工・コンクリート工事」から「基礎ぐい工事」を分離・独立の上、新たな種類として認めてもらいたい。昔は土を掘り、鉛直に吊られた杭の上に登り、ワイヤーなどを掛け直す作業をしていたので「とび・土工」の分類であった。今や

各種の機械や安定液やケーシングを用い、計測データを見ながら施工し施工管理を行う、「場所打ちコンクリート杭」を作る工事業は「とび・土工」ではない。「とび・土工」では基礎を施工する人を思い浮かべられないし、「働き方改革」に繋がらない。

日本建設基礎協会の協雅史会長も常々「業種区分が定められた頃に比べれば機械仕事も変わっている。名が体を表さないのだから今の状況は変である。とび・土工というそんな種類はないと思う。昔はこれで良かったのかもしれないが、名が体を表すよう変えてもらった方がより良くなる。」と理事会等で述べられている。

本年7月13日に、(一社)日本基礎建設協会、(一社)全国基礎工事業団体連合会、(一社)全国圧入協会、(一社)コンクリートパイル・ポール協会の4団体の長が、国土交通省不動産・建設経済局長に要望書を手渡している。杭の施工に携わる4団体の関係者は、杭の品質向上のための施工方法の改良や、基礎ぐい工事業の地位向上への検討を長年行っている。このままの業種区分名では、多くの技術者の士気にかかわる。業種区分変更には現状の把握や将来の展望が必要であろう。どれだけ高いハードルが続いていようが、基礎杭施工業界の発展のため必ず早急にクリアしてもらいたい。

私が経験した名が体を表していない例を最後に一つ。

「杭」が常用漢字にないためか、法律用語では「くい」とひらがなで書く。実は私の博士論文や学生時代から研究しているテーマに、「杭の水平抵抗」という分野がある。大学で研究者になりたての頃、国からの研究費をなかなかもらうことができなかった。申請書を書いても、通らなかったのである。なぜ通らないのか、書き方が悪いのか、師事していた教授がお金を持っていると邪推され、その弟子にはお金を出さないのか、かなり悩み改善策を考えた。

ある時、事務の人が私の研究テーマを手書きで記載している書類を見て驚いた。「鍋蓋(卦算冠ともいう)」が抜けていた。研究テーマが「机の水平抵抗」になっていたのだ。「この若い研究者は一体何を研究しているのか、京大にはやはり変わった輩がいる」という審査員の声が聞こえてきそう。漢字ではなく「くい」とひらがなで書けばよかったか。漢字とは「体を表す」ものであるが、間違えるととんでもないことになる。